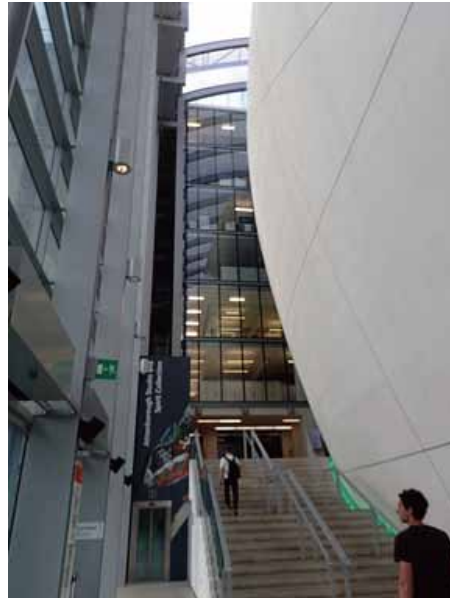


ダーウィンセンターで「バックヤード萌え」

延原尊美

大英自然史博物館には、ダーウィンセンターと呼ばれる現代建築風の施設があります。2009年に開館した第2期ダーウィンセンターは巨大な繭のような不思議な形が特徴で、1881年にできたビクトリア様式の博物館本体と融合して、過去から未来につながるような不思議な空間を演出しています(写真1)。このダーウィンセンターには大量の液浸標本、昆虫、植物標本が管理収蔵されており、繭のような形は過去から未来



1. ダーウィンセンターは巨大な繭のような形(右側)



2. 液浸標本の収蔵の様子を垣間みる

へ標本を受け渡すタイムカプセルのようです。大切な標本たちを害虫・火災・劣化等、あらゆる危険から隔離する現代的な収蔵庫(未来への方舟)でもあるわけですが、一方で、来館者は内部8層構造の「繭」の中の通路を歩きながら、収蔵の様子をガラス張りの「窓」から覗くこともできます。このようにダーウィンセンターは現代的な収蔵庫であると同時に、展示としての動線も設定されている構造になっています。

動線にそったパネルの中には、博物館の基となったサー・ハンス・スローンのコレクションやダーウィンがビーグル号の航海で採集した標本を例に、標本の収集が科学の発展や世界の理解に大切な役割を果たしてきたことを解説しているコーナーがあります。「窓」からはおびただしい数の液浸標本が整理棚にびっしりと並んでいる様を見ることができます。液浸標本は、標本も脱色しラベルからも歴史を感じさせる古いものから色鮮やかで生々しいものまで様々で、長い歴史と今なお収集が続いている博物館の活動の息吹が無言のうちに伝わってきます(写真2)。また、研究者たちが実際に標本を用いて作業しているラボの一部もガラス張りの向こう側に一部公開され

ており、収集された標本がどのような意味を今後もってくるのかについても、あわせて解説・展示されています。私が見学に訪れた際は残念ながら研究者たちは休日で少し寂しい雰囲気でしたが、私の目の前のおじさんは望遠レンズの一眼レフで研究室の様子を熱心に撮影していました。色々な博物館を歩いていると、時にこのように「バックヤード萌え」している方々に出会います(私もその一人ですが・・)。どうして「バックヤード萌え」してしまうのでしょうか? 膨大な標本が集積しているという状態が放つオーラ、それを収める建物の構造としての工夫、標本を未来に引き継ぐ使命に対する組織の誇り・・そんな空気がバックヤードにはつまっているように思います。

バックヤードを見せることは最近の自然史博物館ではなかば当たり前となってきました。ダーウィンセンターは歴史的な標本を生かしながら、現代風の建築とあわせ、「バックヤード萌え」をそるような、粋で効果的な演出をしている点で強く印象に残っています。また同時に、「博物館はどうしてバックヤードを見せるのか」という問いに対して大事な答えを示しているように感じました。